
スフィンクスゲーム ~ 榎田さんちに来たニート ~

YOUKAN

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スフィングスゲーム ～榎田さんちに来たニート～

【Nコード】

N8795Z

【作者名】

YOKKAN

【あらすじ】

スフィングスゲームの後日談、SSです。

ウル

心地よい五月の風が京都の町を吹き抜け。
人の良いパン屋のおじさんの様な太陽がアスファルトを暖める。
突き抜けるような五月晴れの下に彼女はいた。

ウルはレジで支払いを済ませ、サッカー台に6割ほど商品を詰めた籠をのせた。

「ふう……」

平日の午後4時、生協でやや遅い買い物を済ませるとウルはため息をついた。店内の雰囲気味わうかのように眼を閉じ耳を済ませる。

『今日のお勧めはマグロでっせー。うちのダンナも大喜びですわ』

『あんた結婚してへんやーん』

店内の隅っこに置かれたラジカセから店員が出演しているらしい棒読みの台詞がエンドレスで流れ続ける。BGMと割り切るにはあまりにも寒いその内容であるが、ウルは全身は弛緩し、心は溶けそうだった。

『これだ』

恍惚とした表情で持参したエコバッグに買ったものを詰め続ける。イラク北部のクルディスタンで緊張した日々を過ごしたウルにとって平穏な日々は乾き切った心を潤す砂漠の慈雨も同然だった。

普段は強い光を湛えた黒瑪瑙の様な瞳が、今はうつとりと細められ、艶やかな唇は軽く開いていた。だが、緩慢な動作とあいまって官能的というよりは、按摩でツボを上手に刺激されているかのように見える。

『これこそ、私が欲しかった平和だ。ハサンたちにも味わわせてやりたい……』

少し胸が痛んだ。

『しかし』

重くなったエコバッグを肩にかけると、さつきとは違う種類のため息をつき、顔を上げた。その視線の先にはこちらを見ながらひそひそ連れの女性に耳打ちする老婆の姿があった。今のウルは美脚のラインがあらわになったジーンズに開襟シャツ、美夜子から借りたサンバイザーといういでたち。飾り気は無いが、ウルの美少女から美女へと移行しつつある羽化寸前の美しさを引き立てていた。

『なぜだ？肌の色が黒いというだけでなぜあんな眼で見られなければならん？』

ウルは自分の美しさが衆目を惹き付ける原因だとは気付いてなかった。イラクで無数の男に求婚されたが、外国人の女と見れば寄ってくる彼らは全くカウントに加えなかったし、

過去に男女問わず美人だと言われたが、挨拶のようなものだと思っていた。

寧ろ、彼女は自分を美人とは思いたくないというフシがあった。

もし美人であるなら何故先輩と結ばれなかった？まさか、性格に問題があるとしても？

そのようなわけで、ウルは目つきを少し険しくしてゆっくりと二人に歩み寄った。

「なにか御用ですか？」

低い声で静かに訊ねる。相手はお年寄りだ。相応の敬意は払わねばならないと考えつつも、声音に苛立ちが滲み出るのを抑えきれないウルに声を掛けられ驚いたのか、老婆は慌てて連れの女性の背中に隠れた。

『あまりジロジロ見られるのはよい気分ではないのですが』
そう続けようとした。

老婆の娘らしき40代の女性が困ったように言った。

「もう、おばあちゃん隠れんでも・・・ごめんなさいね、お嬢さん、いえね、うちのおばあちゃんがね」

娘の背中でごそごそ手提げをまさぐる老婆に眼を向け、ウルは一瞬緊張を覚えた。

武器？こんな年寄りが刺客？何故日本で？

高速で思考が疾走し、機先を制しようとする無意識に一步踏み出した。

「どこの国の女優さんかしらんですけどサイン貰えんか頼んでみてくれっていうんですよ」

女性の困ったような言葉で頭が真っ白になったウルに老婆がマジックとメモ帳を突き出した。全身が凍ったウルの網膜に老婆の何度もぺこぺこ頭を下げる姿が遠い国の出来事のように映し出される。

.....

「とんでもない。私は只のニートです。ここから歩いて10分ほどの美夜子の家で居候をしています。恋人も友達もいません」

淡々と答えるウルはパニックを起こしていた。おかげで聞かれてもいないし、言っても詮無いことまでつい口走る。

どう答えていいか分からないのだろう、曖昧に笑う女性に向かいウルは続けた。

「いや、失礼しました。日本は久しぶりなもので少し過敏になっていたようです。申し訳ありません」

ウルはダッシュで逃げたいのを堪え、じりじりと後ずさった。

「まあ・・・海外の方やのに日本語がお上手やねえ」

女性は話の接ぎ穂を見つけたのにほっとした様子で言ったが、ウルの頭には既に退却のタイミングを計る事しか無かった。

「光栄ですが、肝心のクルド語はしゃべれないのです。それでは、失礼します。よい一日を」

最後の一言を老婆に向けると踵を返し、颯爽と立ち去る。

後姿も絵になるねえ・・・おばあちゃん、美夜子って樫田さんとのみよちゃんかな？

会話を背中であらきつつ、自動ドアを出る。我慢して歩き続け彼女たちの視界から外れる所まで到達するや猛然とダッシュした。

「何故私はこうなんだ！」

半泣きで舌をヒラヒラさせ、苦いものを消し去ろうとする。

豊かな胸が大きく上下する。盛り上がったってきた涙でにじみつつある

視界を見慣れ始めた

景色が背後に流れていく。

『しかも、余計なことを言ったばかりに美夜子にまで迷惑が掛かる。ああ、もう死んでしまえ！』半泣きで走る褐色の美人を通行人は一様に驚いて眺めていたが、ウルはそれにも気付かなかった。

走ったり歩いたりを繰り返して、榎田家に着くと、手許を狂わせながら慌てて鍵を開け、靴を脱ぎ捨てどたどたとリビングの扉を開けた。
「ひよこおう！」

煎餅を啜え曲げられた座布団を絶妙のポジションにあてがい横になっ
っている美夜子に悲痛な声を掛ける。

「ん・・・お帰りウル」

テレビから視線を上げたものの寝釈迦の様な姿勢は崩さない。

「聞いてくれ！私は・・・」

部屋着姿の美夜子のそばに荷物を放り出して膝まずき、約二分間身振り手振りを加えて
経緯を熱心に伝えた。

一通り黙って聞いていた美夜子は、

「それ、柴崎さんちの親子さんやわ。おばあちゃんもう80過ぎて
んのに元気やな・・・」

また会った時挨拶しとくわ

「大丈夫なのか。美夜子の評判が悪くなったりしないか」
「なるかいな」

「よかった・・・」

テレビに視線を戻した美夜子にウルはしがみついた。

「生協さんは・・・お気に入りのお店なんだ。行く場所を失わずに済
んだ・・・」

ウルは自分も寝転がり、美夜子の身長の割りに豊かな胸に顔をうず
めた。

「はいはい。暑っ苦しいな、もう」

そういいながらも美夜子はおざなりにウルの髪を撫でてやる。テレ

ビから眼は離さないが。一人っ子のウルは溶けそうな幸福感を胸い
っぱいに吸い込んだ。

美夜子

「おーす、ひよこ。居候さんの調子はどう？仲良くやってる？」

美夜子が顔を上げるとカラフルなヘアピンたちが前髪に並ぶショートカットの少女が茶目つ気たつぷりに笑っていた。猫のようなどنگり眼、くつきりとした鼻梁の下で微笑む桜色の薄い唇。

164センチの長身から見下ろす南部莉子を美夜子は教室の席に着いたまま見あげた。

「オハヨ。うん、仲良くやってるよ。買い物とか家事とかめっちゃ楽なっただわ」

鞆から取り出した教科書をさっさと机に入れながら親友に答える。

莉子はふーんと言うと、ポケットからカロリーメイトを取り出した。

「日本人じゃなかったよね？」

「アメリカとの二重国籍で今年決めにやらなんねんて」
もぐもぐと口を動かす莉子に答える。

「んでもって中東系・・・なんかカオスだね」

「本人も悩んどるみたいよ。イラクに行ったのもそれが原因」

「・・・大変なんだ」

「まあ何にせよ、孝太と睦美ちゃんは大喜びや。ただ」

「ん？」

「・・・なんか最近ダレて来たような」

「む・・・」

ウルは樫田家の二階で眼を覚ました。時計の針は午前10時を指している。

『いかん、昨晚深夜テレビが面白かったものだからつい夜更かししてしまった』

「美夜子を手伝わねば・・・もう学校へ行ってしまったか」ポン太は幼稚園、むんは

保育園に美夜子が連れて行ったはずだ。

寝ぼけた声で呟いたものの布団から出ようとしない。

『この体の重さは単なる寝不足ではないな。時差ぼけ・・・はもうとっくに無い筈だし、そうか』

ウルは何週間か前に繰り広げた死闘を思い出した。

今思ってもぞつとするような2日間だった。命を落としても不思議ではない場面ばかりだ。

『あれだけのことがあったんだ。疲れもするだろう』

ウルは布団を口許まで引き上げると再び眼を閉じた。

『この疲れが取れたら今までの倍働いて美夜子をびっくりさせてやる』

いつものようにうだうだと自分に都合の良い言い訳を思い浮かべ、ウルは二度寝へと転落していった。

「ウルー」

美夜子の声に呼ばれ、上下スウェット姿のウルはベランダへ出た。

「どうした美夜子？」

「あそこの釘はずれ掛けてんねんけど背えとどかへんから打ち直してくれへん」

美夜子に指差された場所を見ると、壁に打ち付けられた釘が外れ掛けている。

ハトよけのネットを掛ける釘だ。

ウルは身長でも椅子に乗らないと届かない場所にある。

つまり椅子を持ってこないと作業が出来ない。

ウルは暫く釘を眺めてから言った。

「補修用のパテで穴を埋めてから新しい釘を打ったほうがいいな」

「え、そうなん？」

驚いたように美夜子が出た。

「クルドではそういう作業もよくやったものだ。釘とパテはあるか？」

「ない」

ウルは予測していたように頷き言った。

「近いうちにホームセンターで買ってくる。それまでこのまま様子を見よう」

そういうと一人頷きながら中に入ってしまった。

美夜子は困ったような顔でそそくさと部屋に戻るウルの背中を見送った。

「釘打ちなおすだけでええ思っんやけど・・・」

深夜。

睦美の泣き声でウルは眼を覚ました。2階の8畳の和室で美夜子、ぽんた、睦美が雑魚寝

しているのだが、ぽんたはどんなことがあっても目を覚まさない。

隣の部屋にいたウルは寝ぼけ眼のまま匍匐前進で襖に到達するとそれを開けた。

1歳を過ぎたばかりの睦美が泣くのはいつもの事だ。泣き喚く睦美の傍らで美夜子が

眼を擦りながら体を起こしているところだった。

ウルは睦美との距離を目測した。美夜子の方が少し近い。

それに睦美はウルに慣れてきたとはいえ、やはり美夜子の方があやし方を心得ている。

早く泣き止む方が誰のためにも良い。

ウルはいつものように自分に優しい結論を出すと、そのままぱったりと伏せて夢路に向かった。

「なにイ！」

もとのポジションに戻るのがめんどくさい。

美夜子の小声での叫びを無視し、ウルは眼を閉じた。

「ひよこーおは・・・どったの」

莉子は朝から机につっぱしている美夜子に驚き声を掛けた。

「私は既に死んでいる」

美夜子はうつ伏せたままぐもった台詞を漏らした。

「ならば」

「ひゃっ」

胸を後ろから揉まれた美夜子は飛び起きて莉子を睨み付けた。

「ふっふっ。良い乳じゃ、今宵閨を共にせい」

手をわしゃわしゃしながらニヤつく莉子に美夜子は早口で言った。

「只でさえ疲れてんのにこれ以上怒らさんといて!」

「美夜子、今夜は一緒に寝るか? by兄」

「お兄ちゃんやつたらしゃーない・・・ちやうやろ」

美夜子は疲れたように言うと再び机に突っ伏した。

「なにーさ。ウルさん来て楽になっただんでしょ?」

少しの間を置いてから美夜子はフツと鼻で笑いいった。

「そんなことを言ってたオメデタイ時もあつたな」

壁に掛かった受話器を取ると、インターホンを通じて野太い声が聞こえてきた。

「うーす、お呼びにより無職参上」

「2階まで上がって来て」

九城の軽口に答えず美夜子はつつけんどんにいった。

程なく階段口から九城がその逞しい姿を現した。

今日はタイで買ったらしいだぶだぶのステテコのような黒シルクのズボンに派手なTシャツだ。履物はきつと草履だろっ。どこのチンピラだ。

「おーひよちゃん、どしたん?」

どこと無く気後れしたように九城が聞いた。

呼び出される心当たりがイマイチないという顔だ。

美夜子は無言で背中を向けると右手でついて来てというしぐさをした。

のっしのっしと九城が続く。

扉の前で立ち止まると美夜子はむすつとしたように中に声を掛けた。
「ウル、入るで」

返事も聞かずにドアを開ける。

中を見て美夜子は大きいため息をついた。

「九ちゃん、見て」

「大丈夫なんか、俺覗いて」

九城が不安そうに言った。棒で殴られるのはごめんだと顔に書いてあった。

「いいから」

苛立った様に美夜子が言うと、恐る恐る中を覗き、九城は石化した。10秒そのままの姿勢を続けてから九城は額に青筋を立てている美夜子にゆっくり顔を向けて言った。

「随分ミズ・ウルマにそっくりな芋虫がテレビ見とるけど」

布団に包り、鼻の穴にチリ紙を突っ込んで画面に虚ろな眼差しを向けているウルを見て

九城が言った。

「九ちゃんが連れてきた芋虫やがな」

眼を閉じて怒りを抑えながら美夜子が言った。

「病気なんか？」

「三食食べて深夜までテレビ見て朝10時過ぎまでねむっとるのが病気っていうんなら

そうやるな」

「・・・嘘やろ」

九城の中には凜々しいウルのイメージしかないらしい。

逆に美夜子の中にはダメ人間の見本のようなイメージしかなかった。

「最初はよう手伝いしてくれたけど、今は見ての通りや」

「これはないな」

「九ちゃん」

「はいな」

「連れて帰って」

「そういわれても」

「む・・・美夜子に九城じゃないか」

ウルはようやく気付いたらしくこちらに横向きで寝ていた顔を向けた。

ウルは自嘲するように鼻で笑うと言った。

「九城、こんな格好で申し訳ない。少し風邪を引いてしまったらしくてな」

「お、おお。風邪なんか、そりゃいかな」

九城は戸惑いながらもほっとしたように言うと美夜子に顔を向けた。

「風邪やて」

美夜子はジト眼をウルに向けたまま九城に呟いた。

「見とき・・・ウル風邪なん？」

「うん。子供たちにつつすで行けないからな。全く忌々しい」

眼を逸らしながらウルは辛そうにため息をつく。

「そう・・・学校の帰りに生協さんでイチゴアイスかってきたんやけど、風邪ならしゃあないな」

ウルの動きが一瞬止まる。

「今晚はおかゆさんにしとき。九ちゃん、代わりにアイス食べてって」

言いながら美夜子は踵を返そうとした。

「待て、美夜子」

「何」

「アイスは風邪には良いような気がするんだが。体温が下がりそうだし」

「んなわけないやろ」

「本当だ。看護学校でも習ったんだ」

「んなわけないやろ！それから、ウル棒つきれそこらへんに置かんといつていうてるやろ、子供らが怪我したらどうすんの」

「ああ、悪かった。今は布団の中で抱いてるからその気遣いはない」

「そらあかん。温い内に没収や」

真面目くさつて呟く九城の足を美夜子は思い切り踏んづけた。

「朝、素振りをしてそのままだった。すまない・・・そのせいで風邪を引いたのかもしれない」

「風邪引くほどやってんの？」

足を抱えてぴよんぴよん跳ねながら九城が聞くと、

「毎朝30回」

「少ないな、おい！」

「クルドにいた頃は朝晩200回ずつ振ってたんだが、少しばかり気が緩んできたのかもな」

ウルはしれつと答えた。

「いい加減布団から出て夕食の準備手伝って！」

「あ、ああ。体調も戻って来た気がするし、そうしよう」

ぼさぼさの頭のまま、いきつかけが出来たとばかりにウルは布団から出てきた。これでアイスが食べれるとも思っているのだろう。立ち上がったウルを見て美夜子が怒声をあげた。

「あーっ！また兄ちゃんのお泊り用パンツはいてる！それ絶対やるなってゆうたやる！」

艶かしい、腕や顔より遥かに白い足は男物のトランクスからよっきりと伸びていた。

「あ、楽だからつい」

美夜子のいつもとは段違いの剣幕にウルはたじろぎながらも「ごも」言った。

「あんたは、火災でラブホから飛び出してきた痛い女か！十ちゃんの衣類にさわってエエ女は私だけやって何回言わせる気！？ましてや、履くってどういう見さ」

次の台詞で九城のタマシイはどっかに飛び立った。

「私の特権やのに！」

「す、すまない。ちゃんと洗濯するから」

「耳ついとんか！さ・わ・る・な・いうてんねん、脱げ！」

「わ、わかった」

慌ててトランク스에手を掛けたウルは九城に険しい眼を向けた。

「何を見ている、出て行け！」

「・・・好きにせえ」

八つ当たりに怒る気力も無く九城は入り口から離れ、呟いた。

「痛い・・・何もかも痛すぎる。ウルもひよちゃんも」

ベランダ

翌日。美夜子のストレスはほぼMAXに達していた。

あの後九城は微妙に眼を合わせず「まあ、もうちょい様子見てそれから」と弱弱しく眩き、とぼとぼと帰ってしまったのだ。

様子を見てから。これ以上やる気のない台詞があるだろうか。

そっぴいえば同じ事を言っていたウルは勿論まだホームセンターに言っ
つてない。余計腹が立ってきた。

学校から帰ってきた美夜子は2階に上がった。夕方になって湿気る
前に洗濯物を取り込むためだ。ウルは当然あてにできない。

何を考えているのかベランダの入り口でだらしなく熟睡しているウ
ルがいた。美夜子は背中に蹴りを入れるといった。

「邪魔や。只でさえ無駄におっきいのに」

「む・・・美夜子おかえり」

呟くように言うところりと転がって最低限の道を空けた。

「っ！・・・」

思わず歯を剥き出してしまいが、大きく息をついて平静を保った。

もう、寝転んでいる言い訳すらなくなってきた。洗濯物を畳んだ
ら別の住処を見つけるよう話をしよう。平和な寝顔を見ていると多
少同情の念も沸いてくるが、うちは子供二人以外にオバQまで養う
余裕はない。洗濯物を取り入れながら考えていたのだが、昨日ウル
が下着の上から穿いてた兄のトランクスがぶら下がっているのを見
て、下の牙を剥き出した。他の女が兄の服を身に着けているところ
など想像するだけで怒髪天をつく。ましてやパンツを穿くなど・・・
もしウルが素肌に直で着ていたらボールのようなもので滅多打ちに
して『別に後悔していない』とコメントしているところだ。

美夜子は洗濯物を抱えたまま室内に戻ると言った。

「昨日風呂はいったん？」

「・・・どうだったかな。風邪だし」

もごもごと答えるウルに、

「シャワーでも浴びといで、只でさえ黒いんやから。あがったらキツチン来て」

何気に言い捨てた。

「ん」

・・・

「なんだとおっ!?!」

「ひゃっ」

背後からの怒声に美夜子は飛び上がった。

振り向くと膝立ちになったウルがこっちを見てわなわなと震えていた。

「急におっきい声出さんといてよ!」

「い、今黒いつて言ったらろう、美夜子」

「・・・うん言っただよ。それが」

ウルの身振りをたっぷりと加えた台詞に遮られた。

「信じられん!美夜子、酷い差別じゃないかあ!」

美夜子はきよとんとして尋ねた。

「え、気にしてたん?」

「当たり前だ!別に汚れているわけじゃない、好きでこの色にうまれたわけじゃないんだ!」

美夜子としてはウルのすらりとした高い身長、野生的な外見にマッチした褐色の肌に羨望すら感じていたので全く他意はなかった。

「あ、そうなん。ごめんごめん」

「なんだその心の籠もっていない謝り方・・・あーっ!その前に無駄に大きいっていったろ!?!」

「うん」

ウルはよろめき、涙を浮かべて顔を歪めた。

「神よ・・・天使と想像していた彼女がこんな人間だったとは」

美夜子はむすつとして言った。

「その言葉そっくり返すわ。寝てばかりで手伝いもせんと」

それが聞こえていたのかいないのか、ウルはただひたすら被害者顔を崩さなかった。

「私の気にしている事を2つも！好きでのっぼさんに生まれたわけじゃない、

ひどい、ひどいぞ！」

「のっぼさんって言い回しかわいいな」

「ごまかすな！もつとちゃんと謝れ！」

ぴよんぴよん跳ねて腕をぐるぐる振り回すウルを見て、不覚にも萌える美夜子だった。

「はいはい、めんちゃいめんちゃい」

背中を向けてとたとた歩き出した美夜子にウルは付いてきた。

「わたしはな、そんな酷い事を言ったのが美夜子だから怒っているのだ。

妹のように思っている美夜子にそんな事を言われるなんて」

その場につつ伏し床を叩きながらアオオとか泣いているのを肩越しにちらりと見やる。この辺のジエスチャーがアメリカ人っぽいとか醒めた気持ちで

思った。

「私は、私はなんて不幸なんだ。何でも話せる友人が出来たと思っただのに」

「そら、ウルはええよね」

美夜子はウルに向き直った。

その口調の冷たさにウルははっと顔を上げた。

「好きなこと私に言って好きなことやってるんやから。で、ウルは私の

話聞いてくれたん？」

ウルは呆然と美夜子を見あげたままだ。

「あのな、自分が楽なときって、大抵相手が大変なんよ。日本人って特に最後の最後まで顔は笑ってるけどな」

喜んで駆け寄ってみたらひっぱたかれた犬そのものの表情を浮かべ

ているウルに向かって言った。

「NOが言われへんわけやないで。ウル、私子供らの面倒見るだけで精一杯や

ねん。他で住むところ探して」

長女

きい、きい。

ウルはぼんやりとゆれる鎖を見上げていた。ブランコから見上げる空は大分黄金色へと変化しつつあった。傍らには大型のトランクが侘しげに主人を見守っている。

檉田家から歩いて10分ほどの小さな児童公園にはウル以外、2、3人の小学生が滑り台で遊んでいるだけだった。

これからの事を考えないといけないのだが思考が全くまとまらない。美夜子にさつき言われた台詞だけが何度も繰り返し映像つきでウルの脳裏で再生され続けた。

体に力が入らない。

「あんな風に言わなくてもいいじゃないか」
何度目かになる独り言を呟く。

確かにこの数週間はだらしない生活をして美夜子に負担を掛けたがそれにしても人の身体的な欠点をあげつらうとは性格を疑う。急にムカムカして来た。

やっぱり美夜子はアウルデリーの妹だ。

そう思いながら自分がやって来たことは極力思い出さないようにした。

「こんなとこでなにしてんねん」

声に振り向くと、公園の入り口に通りがかったらしい九城が立っていた。手にはマクドナルドの紙包みがあった。

「九城か」

ウルは不貞腐れた顔のまま言った。

「どないしてん。追い出されたんか？」

トランクに眼をとめた、九城の軽い口調での問いかけに、
「どうでもいいだろう」

顔も見ずに答えた。

「そういう訳に行くかいな、紹介した手前俺にも責任でヤツがでくんのよ」

ブランコの前にある鉄の自転車止めに腰掛ながら九城が言った。

「まあ、話してみ？」

ウルが一通りさつきあつた事を話すと九城が顔を顰めた。

「まあ、それはあかな。誰しも気にしてる事はあるもんやし」

そういつて携帯を取り出し、どこかにコールした。

微妙な緊張と期待の間。

「おー俺オレ。今近くの公園でミス・ウルマと会って話ししてたんやけど・・・」

暫く九城は無言で携帯を耳に当てていた。

「え・・・そうなん？マジで？それは・・・はい」

ウルがチラリと見ると九城は引きつった顔で通話を切るところだった。

気まずい沈黙。九城は俯いている。

堪えきれずにウルは涙目で叫んだ。

「私が悪いのか！」

「ジブンが悪いやろ」

九城はうんざりしたように言った。

「なんでだ！あなたも私を差別するのか！」

「それやめて。んじゃ関わらんとくわつて言いとなるから」

九城は一つため息をついて言った。

「確かにひよこちゃんも言い過ぎかも知れんけど・・・ジブンちよつと甘えすぎやろ」

「確かにここ暫くは弛んでたのは認める。でも私だっているいるあつたんだ」

頬を膨らませてそっぽを向く。

「全部ミス個人のことやろ。ひよちゃんにはなんの関係もあるかいな」

「美夜子があんなことを言うなんて・・・やっぱり彼女はあの皮肉な」

屋の妹だ」

俯いて口を尖らすウルに九城は語気を強めた。

「そうや、わかっとるやんけ。あの子はジブンがちよっかい掛けた十崎の妹や。気付いてるか？悪気はなくてもひよこちゃんから兄貴を奪うとこやったんやで。確かにきっかけを作ったに過ぎんかも知れんし、それを言うなら俺も責任あるけど・・・」

九城は横を向き苦そうに言った。

「なんか、みんなでひよこちゃん虐めてるみたいやな」

その言葉はウルの上に金属バット並みの破壊力で打ち込まれた。

さすがに言葉を失ったウルに九城は寂しげに続ける。

「ジブンが大変やったんは分かるよ。でもミス・ウルマ、子供の守も大変なんよう知ってるやろ？気持ちに余裕が無いんなら去るべきやわ」

ウルは答えられなかった。自分がやってきたことがいまさらながら足の裏から恥辱の熱を持ってゆっくりと頭のとっぺんまで上ってきたからだ。

「アッラー・・・」

ウルは我知らず呟いた。

九城は立ち上がった。

「俺行くわ。いつかまたな」

九城が入り口に向かって歩いていく足音を痺れた頭で聞いていた。

それが立ち止まる。

「ミス・ウルマ」

九城の呼びかけにウルははじかれたように顔を上げた。

かすかに笑うシャープな顔が公園の入り口に向かって顎をしゃくった。

そこには・・・

制服姿のまま腰に手を当てジト眼でこっちを見ている150センチそこそこの天使がいた。思わず腰を浮かし、口を半開きにして瞠目するウルに向かい彼女は叫んだ。

「どうすんの!？」

出て行けと言っておいてどうするのもないだろう？

「ミス。勝負どころを間違えんなよ」

ウルにだけ聞こえるように言つと九城は美夜子の肩を叩いて立ち去った。

「どうすんの？来るんならよして。カレーの火切つたままやねんから!」

ウルは俯くと硬い動作で入り口に向かった。

「トランク!」

美夜子の一喝にあわてて忘れ物を取りに戻る。

可愛らしいリードカーについてウルは通いなれ始めた榎田家への家路を辿る。

家路。

自分からは遠く離れていた家路。

誰かが待っているホームへ。

ウルの視界がぐにやりと歪んだ。

自然歩く速度が落ちる。

前に行く足音が止まる。

「ん、もう急いでんのに」

悪態とともにかばんを引いてない方の手を握られた。

さっきの言葉と裏腹にゆっくりとした歩調。大河を引かれていく小船のように。

堪えきれずウルは嗚咽を漏らした。

「ごめん」

「はいはい」

「ごめんな」

「私もごめん。でもこれからはちゃんとお手伝いしてや。できる範囲でいいから」

「がんばるよ。ごめんな」

ウルはついに大声を上げて泣き出した。

子供のように泣きじやくる褐色の美女を牽引する女子高生。
通行人は好奇の視線も露に二人を見たが、気にしなかった。
「もう、いくつなんよ」

そういう美夜子の眼にも涙が光っていた。

「ひよこー調子はどうだね」

いつものように莉子が来た。

「む。悪くなさそうだね、つまらん」

「おはよー莉子」

教科書をさっさか机に移し変えながら美夜子は返事した。

「恐怖の居候さんはどう？」

「んー」

美夜子は暫く空をにらんで唇を曲げていたが、少し苦笑を交えて朗らかに言った。

「長女が増えた気分」

長女（後書き）

ありがとうございました。楽しんでいただけたでしょうか？

それではまた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8795z/>

スフィンクスゲーム ～ 櫻田さんちに来たニート～

2011年12月29日16時50分発行